

2003年、南米、ブラジルへ

平成15年度在南米被爆者健康診断事業派遣団員：日本赤十字社長崎原爆病院 森 秀樹

出発1ヶ月前にあわてて、お台場の東京検疫所で黄熱病の予防接種を受けて、各種虫除けグッズを持参し、成田を2003年10月23日に、まずはニューヨークへ向けて出発しました。医師団は私を入れて3人で、団長は広島赤十字・原爆病院の消化器科部長山岡先生、温かい笑顔の持ち主で、ユーモアのある白髪小柄な方、そしてもう一人は広島市民病院の地域医療を目指す若き短髪トライアスロンマンの東條先生という構成でした。事務方として広島県から実直緻密な柳井さんとビールが好きで明朗な勝田さん、そして長崎県からは紅一点の我等が島村さん。皆のっけから意気投合して和気あいあいな、そしてドキドキする初めてのブラジルでした。

ニューヨークは一時降車地で、再出発までの間、ジョン F ケネディ空港に降りました。9.11テロ事件以後、検問が厳しくて再搭乗する際には靴まで脱がされました。確か公用旅券で外交官待遇と聞いていましたが、うそばかりでした。皆と一緒に裸足で検問ゲートを歩かされました。ニューヨークからサンパウロまでの飛行機は成田からのものと同じJAL 便で、皆もうらやむビジネスクラス、足を伸ばして、和食、洋食交互に食べて、ビール、日本酒、ワイン、焼酎飲み放題。

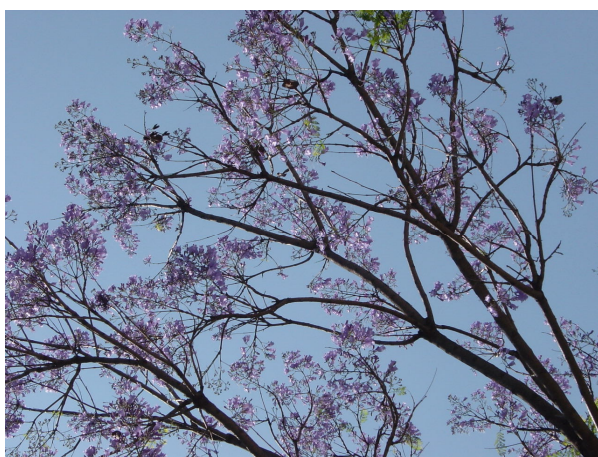
日本から四食食べて、二眠り、10月24日朝、サンパウロ空港に機はおもむろに降りたちました。空は晴れて、地平線はどこまでも続き、大きな綿みたいな雲が近くにぼっかり浮いています、空が近くに見えるのはサンパウロが標高900mの高地の都市（人口一千万人以上のメガシティで、車は所かまわず全力疾走しています。）のためという説明に納得してしまいました。空港では在ブラジル原爆被爆者協会会長の森田ご夫妻が迎えに来てくださいました。ご主人のほうは小柄で元帝国軍人、背筋は伸び声大きく、眼も大きく開き、なにやら小さな仁王様風でした。一方、奥様も小柄で芯は強いながらもやさしい雰囲気気で身を包まれた方との印象を受けました。



サンパウロ、グアルーリョス国際空港

少しくたびれた白っぽいワゴン車に皆乗り込み、途中は珍しい木々やそれに咲いている

赤い花、黄色い花に見とれていましたが、やはりありました町の中心部に入る境目のところ、壊れかけた赤っぽいレンガ造りで、小さい低層住宅が密集するスラム街です。サンパウロは物騒で、高そうなカメラ、時計、服などは身につけず、襲われたら抵抗せずに金目の所持品はすぐ持っていかせてくださいとの事でした。そして一人外出は責任持てませんと言われましたが、小さい日本人が2～3人でいても結局同じ事でしょう。ワゴン車を運転する若者は日系二世の好青年、宝石・家具・車・みやげ物などの販売をする実業家です。日本語会話はほとんど OK でした。これからのサンパウロでの移動は全て彼の華麗なるドライブテクニックに身を任せる事になりました。



街路樹、ジャカラントという清しい木

まず向かったのはサンパウロ日伯援護協会が運営する日伯友好病院で、その規模は心臓外科、脳外科、癌治療科、救急科などを含む41診療科、医師139名（日系医師は98名）看護師430名（看護大卒71名）、全183床（CCU/ICU23床）であり、現地ポルトガル語の他に日本語が使用できるために、被爆者をはじめ日系一世の患者さんに対応が出来ているとの事。ちなみに2002年の1年間の診療実績は入院患者総数11,274名、病床稼働率85.1%、手術件数6,167件、出産件数1,389件でした。この大久保院長先生は日系二世の笑顔が印象的な白髪で小柄の先生でした。日本語を話されましたが、漢字はむずかしいと仰っていました。日赤長崎原爆病院の進藤院長から大久保先生宛の親書を預かっていましたので、お渡ししまして、感謝のお言葉を頂きました。これから先、長崎原爆病院と日伯友好病院の間で交流が始まると思います。そして、院内を案内して頂き、記念写真後、次の訪問先に向かいました。



日伯友好病院の大久保院長へ原爆病院進

藤院長からの親書をお渡ししているところ



日伯友好病院玄関前で記念撮影

サンパウロ日本領事館は市中心部のビルのワンフロア - にあります。ビルに入る時はブ
ロレスラーの如き体格の警備員がいて身分証明書をチェックしていました。そこで石田サ
ンパウロ総領事を表敬訪問した後に、サンパウロ郊外のイビラプエラ公園内にある日本移
民慰霊碑を参拝し、中沢宮城県人会会長から説明を受けて記帳しました。



イビラプエラ公園の日本移民慰霊碑

夜、市内のレストランで、在ブラジル原爆被爆者協会による歓迎会が催されました。地ビ

ールで「ビヴァ！」と何度もつばを飛ばして乾杯した後、串刺しの牛肉を給仕がうやうやしく背部から差し出した時に、いかにもなれた様子で「オブリガード」と言いながら食べるのです。いわゆるシュラスコです。明日から始まる被爆者健康診断のために遠くアマゾンから来られたご夫婦とお会いしました。ご夫婦は淡々としかも力むことなくアマゾンの事や生活などをお話しされておられましたが、さぞ大変な事であったろうと思われました。楽しい中にも検診の持つ意味の重大さに慮りました。ホテルに帰り寝る準備、クーラーもありませんが、スカッとした空気で、虫が一匹も見当たりません。シャワーをあびて安らかに眠れました。持ち込んだ対虫対策グッズが無駄になりそうです。



シュラスコ料理、在ブラジルの被爆者の

方々と

翌朝7時にホテルのバイキングで食事をとりました。オレンジジュースとトロピカルフルーツの甘いこと、ハム・チーズもいけました。8時過ぎから、赤いペンキで彩られた鉄製の異様な提灯が並んでいる、東洋人街の一角の日伯援護協会診療所で最初の在ブラジル被爆者健康相談および健康診断がスタートしました。



日伯援護協会診療所での健康相談風景

10月27日までの間にサンパウロで計78名の長崎・広島両県の被爆者の皆様に対して行政相談と健康相談を終了しました。内1名、私が担当しましたが、診療所の車でサンパウロ市内から高速道路を使用して片道2時間30分かかる緩やかな起伏のある赤土の酪

農地区に、長崎出身で片麻痺がある方の往診に行きました。驚いた事にサンパウロを起点として十分に広い高速道路網が何本も整理されていました。日本のように片道2斜線で、すぐ隣に対抗斜線があるのではなく、片道4斜線ぐらいあってはるか草原の向こうを対抗斜線が同じように広大に走っていました。またサンパウロを含みその周辺も台地に乗っかり、はるか向こうには大きな山脈が見えていますが、ほとんど丘程度の起伏しかありません。

10月28日はサンパウロ最終日で、午後から日伯援護協会診療所で、日伯援護協会、日伯友好病院、在ブラジル被爆者協会の代表の方々と意見交換がありました。冒頭、森田会長から今回健診を受けた皆様がとても喜んでいた事を伝えられ、感謝のお言葉を頂きました。被爆者の方々は長崎、広島を離れてすでに何十年も経っており、その長崎、広島から来た医師団とそれぞれの方言で話できた事がとても懐かしく思えたこともあるようです。渡日治療について、日本に病状が悪くて来られない場合や緊急治療を要する場合などの悩みがあるようです。これには日伯友好病院が対応する事が可能とのことでしたが、費用についての問題が残ります。また被爆2世の健康診断についての要望もありました。

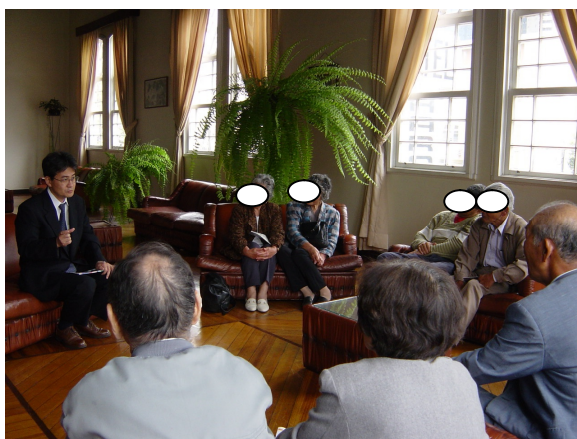
翌朝、ブラジル国内便を使ってパラナ州の首都クリチバに向かいました。(医師団は二手に分かれ、長崎班はクリチバに、広島班はマリリアに向かいました。)クリチバはサンパウロの西にありジェット機で約1時間の所です。今回は観光目的ではない!?ために行けませんでした。クリチバのさらに西、アルゼンチンの国境に接して、有名なイグアスの滝があります。クリチバも高原にあり空気もからっとしていました。ブラジルと言うとアマゾンを連想してしまい暑苦しく虫や野獣が多い所と思いがちですが、人が住んでいる大部分の場所は高原地帯で過ごしやすい所です。クリチバはドイツ系移民が多いためか町は整然とし美しいところでした。そしてサンパウロよりも安全でした。ハラパレスホテルにチェックインし、レストランで白人の婦人会らしき一団と同席で昼食を食べた後、市内の公園に向かいました。公園内はよく手入れの行き届いた芝生が広がり、本当にうららかでした。



クリチバ市内の公園と奥に見える植物園

クリチバでの健診はハラパレスホテルの敷地内にある診療所で、日系ドクター野田先生

と一緒に行ないました。この方も大久保先生と同じ雰囲気を持たれる先生で柔らかいそしてほほえみの耐えない先生でした。ハラパレスホテルという名前からお分かりのように、このホテルのオーナーは原さんという日系人で、第2次世界大戦中にヨーロッパ戦線に従軍し、地元で尊敬を受けた方です。聞くとところによると日系人はブラジル人の1%に過ぎないですが、医師は日系人が10%を占めているとのことでした。クリチバでは29日午後と30日午前で計10名の被爆者の方々がパラナ州の各地から来訪され、行政相談と健康相談を受けられました。



健康相談の合間の健康講話風景

30日のクリチバ最終日、健康相談事業終了後の昼食は、クリチバ総領事館の青山総領事を表敬訪問しまして、いわゆる大使館付きの料理人の腕前を堪能する事が出来ました。



総領事館内の会食風景、左中央が総領事、

左手前が島村さん

夕刻、次の訪問地リオデジャネイロへ向けてフライト。20時過ぎにリオ上空を巡回しながら徐々に下りていきました。上空から見る街の灯りがとても印象的でした。今度は旅行社が回してくれたマイクロバスに乗ってホテルまで。空港を離れてからまもなく、はるか暗闇までずっと広がる海岸がバスのすぐ横に見えるようになりました。これがコパカバーナ海岸です。そして次に続く海岸がイパネマ海岸で2つ合わせた海岸線は非常に長いものでした。ホテルはイパネマ海岸に接してありました。

翌10月31日朝、イパネマ海岸を恐る恐る山岡先生、東條先生、島村さん達とホテルからほんの近くまで散歩に出かけました。回りは半袖、半ズボン、水着姿の大きな外国人？カリオカ（リオ生まれのブラジル人）ばかり、背が低く、凹凸の少ないアジア人は我々を除いて一人も居ませんでした。聞くところによるとつい最近、日本人観光旅行者が海岸で強盗団に囲まれたということでした。海岸道路にポリスが立っていますが、道路から海のほうへさらに行くと、ポリスから見えなくなるために危ないとのこと。そういえば坂口厚生労働大臣から現地旅行社に我々の事を宜しくというメッセージが入っていたそうです。



イパネマ海岸で、中央は島村さん、右端

は山岡先生

午後はリオ総領事館に表敬訪問し、被爆者健康相談事業への協力をお願いしました。帳が下りてからリオ市内のシーサイドレストランで、ご当地ソングを聞きながらの食事は、周囲の夜景とレストランの雰囲気がよく合っていて、おいしく、楽しいものでした。



シーフードレストラン、ソル・イ・マー

ルでの在ブラジル原爆被爆者協会ご夫妻、後ろでは我々の為に名曲スキヤキを演奏してくれました。

食事を終えてから、我々若者？たちはプラタフォルマという、サンバショーをやっている観光客専門の劇場に行きました。ここではブラジルの歴史をサンバで味付けして披露してくれました。当然ミニカーニバルショーも出てきました。団体さんも来ていて、ポルト

ガル、オーストリアそして、やはり日本からも。



カーニバル風出し物、皆美しき大女でした

翌日、リオ総領事館では6名のリオ在住の被爆者に対して行政相談と医療相談を行いました。今回のブラジル健診では高血圧、糖尿病、高脂血症、骨粗しょう症などが多いことは予想されましたが、意外に肥満が少なく、心臓病も多いという印象はありませんでした。その他には胆石や脳梗塞が数人に認められました。1名、大きな胆管内腫瘍が超音波で見つかり、本人や家族の希望と現地での医療事情もあって、渡日治療する事が決まり、帰国後、長崎原爆病院でその準備をする事になりました。

午後はいいにく曇りでしたが、やはりリオに来て、行かないわけには行きません。コルコバードの丘の巨大なキリスト像と世界最大のマラカナン競技場です。まずコルコバード登山電車に乗り、標高710mの霧がかかった丘の上にキリスト像がありました。



コルコバードの丘のキリスト像、高さ30m

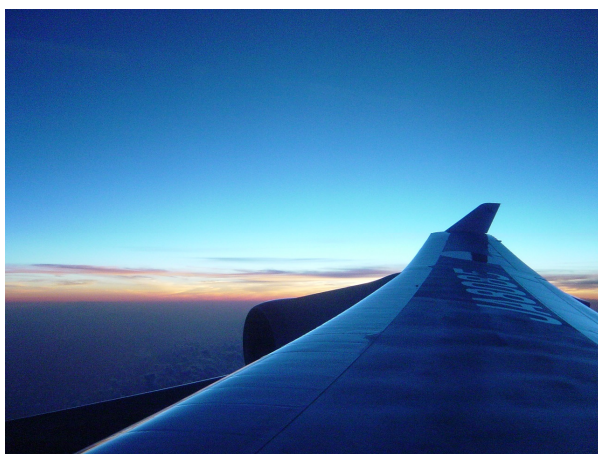
で、内部に礼拝堂があります。手を広げているのは島村さん

ブラジルはサッカーのメッカ、1950年のワールドカップ開催時にマラカナン競技場
が設立されました。競技場入り口前にはペレやジーコたちの足型があり、ハリウッドスタ
ーなら手形ですが、サッカースターですから足型というわけです。



マラカナン競技場、中の芝生に観客席か
ら行けないように深い堀が設けてありました。

翌11月2日、いよいよブラジルを離れる時がやってきました。今回のブラジル健診で
は、在ブラジル被爆者協会会員総数133名中103名と手分けしてお会いしました。平
均年齢は71.8歳で、男性49名、女性54名でした。また被爆地は長崎35名、広島
68名でした。リオデジャネイロ空港では長崎市から来られた中村親子が我々を見送っ
てくれました。飛行機は一旦サンパウロのガルーリオス空港に立ち寄り、ここで森田会
長ご夫妻と在ブラジル原爆協会理事の盆小原さんのお見送りを受けて、ジョン F ケネ
ディ空港経由で成田に向けて出発しました。出発前は長い旅行期間と考えていたが、や
っぱりアット！という間の出来事でした。日本に帰れる喜びと過ぎたばかりのブラジ
ルの懐かしさ、そしてお会いした皆様の暖かさ、感謝。



帰りの JAL 便の翼